
『猫かぶり姫と天上の音楽』イラストギャラリー ♪

もり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『猫かぶり姫と天上の音楽』イラストギャラリー♪

【Nコード】

N3233P

【作者名】

もり

【あらすじ】

頂いたイラストを紹介させて頂きます。

また、パラレルストーリーや、超短編の番外編を掲載させて頂いています。

*マークがイラストです。

花*天上の音楽

なんとなんと、嬉しい事に卯堂成隆様から『猫かぶり姫と天上の音楽』のイメージイラストを頂いてしまいました！！
なんてこったい！！

シーンは38話の「天上の音楽」のイメージです！！

本編に挿絵として挿入しようかとも思ってたんですが、人それぞれのイメージもありますので別物として、卯堂様に許可を頂き掲載させて頂きました。

> i 1 4 5 4 5 — 1 4 0 2 <

綺麗ですよね〜ムフフフ

卯堂様、ありがとうございます！！

話は変わりますが、人それぞれのイメージって本当にありますよね。特に私の書いている人物は描写が甘いのでかなり皆さまバラバラだと思っています。申し訳ありません。

せめて主要キャラだけでも、もっと細かにすればよかったです。
・すみません。

友達と話していてルークのイメージの違いに、本当に申し訳なく思いました。

でも今更なので皆さまのイメージでお楽しみ下さい。（投げた！？）

卯堂様、本当に素敵なイラストをありがとうございました！！

ジャスティン&リリアーナ*

またまた卯堂様から頂きました!!

ジャスティン&リリアーナです!!

> i 1 4 9 9 6 — 1 4 0 2 <

なんというか・・・大人の色気? w w
男性視点だとこんな感じなのかな???
と勉強になります(爆) ↑何を勉強するのやら。

ちなみにリリアーナの服装 w w

まあ、私のイメージもドロシヨ様の仮面なしっていうか、網タイツにニーハイブーツがいいですね w w

さて、もうすぐ登場するシェラがこのシーンを見てどう思うのやら・
・

卯堂様、ありがとうございました!!

リカルド*

皆さんが素敵なイラスト描いているから、つついウズウズして描いてしまいました(汗

一応、人気のないリコつちなら(てか、むしろ嫌われてる?w)、イメージ崩壊もないだろうなと思って、私の中のイメージを何となくですが・・・

うーん・・・

まあ、結局イメージ通りにはいかないと言う事で・・・

> i 1 5 3 1 2 — 2 1 3 4 <

いつも穏やかな顔してるはずなのに、なんだかアンニュイに仕上がってしまいました。

どうでしょう？

皆さんが、もしイメージして下さいて、イメージ壊しちゃったならすみません。

まあ、こんなもんです。

ルーク&レナード&ディアン*

またまた牛さん（卯堂様w）からイラスト頂きましたー！！！！

もう、なんていうか、肖像画！？的な！！！！

とりあえず、観て下さい！！！！

> i 1 5 3 9 1 — 1 4 0 2 <

どうですか？

なんかもう、悪の帝王ですよね！！（大爆）

あれ？実はルークって悪役？みたいなww

でも、その通りです！！（コラ）

花とゆかいな仲間たち以外にとっては、極悪非道な奴ですから。

敢えて語りませんが、（語ってるがな）ルークの性格は元々、暗い奴ですから

あ、イメージ崩れたら大変なんで言い方を変えましょう。

根は真面目で、どちらかと言うと人見知りタイプ（あ、なんかかわいい・・・というか、益々イメージ崩壊？）。皇太子になる以前から、気を許した相手以外には徹底的に冷たい人間でした。

帝王学の中には命の尊さなんてありませんでした（この世界のね）

。

その辺はジャスティンが頑張つて、少しマシになったんですがね・
・という、裏設定があったりとか・・w w

そんな感じの？イメージがモロでとるがなー！！！

肖像画の画家さんに対してはこんな感じだったでしょうねw w
そして、ディアン of 陰険そうな顔！！w wさすが、画家さん内面
をよく映してらっしゃる。

1人、明るい雰囲気 of レナードが、すっごいい奴オーラ出して
ますよね！！

ディアンと同じパーツなのに、ここまで違う印象が出せるなんて
すごい！！

卯堂様・・あ、牛さんw 本当にありがとうございました！！

年始企画 パラレルDEお正月。 (前書き)

とある作品とのコラボです。

年始企画 パラレルDEお正月。

「新年、明けましておめでとございます。今年もよろしくお願ひ致します」

「……よろしく?」

青鹿の間に入った途端、ルークは正座して三つ指ついた花に迎えられる。

「ハナ……その格好……」

ルークの後に続いて入って来たレナードが思わず呟く。

「はい、お正月なんで振袖です」

「正月?」

ルークは訳がわからないといった表情で問う。

花が正座している場所、本来なら応接ソファなどが置かれている場所は何重にも絨毯が敷かれ、そこに布が掛かったテーブル?が置かれていた。

「ハナ……それは……」

「はい、翔さんが送って下さったコタツです。ミカンもありますよ」

「……あいつか」

ルークの何かを含んだ眩きには気付かず、花は嬉しそうに続ける。

「あ、靴は脱いで下さいね。で、直接床に座ってください。あんな感じに」

と指差したのは、すっかりコタツで寛いでいるアポロン。

「いや、待て。なぜお前がそこにすでにいて、しかもミカンとやらを食ってんだ!？」

花が、「アポロンさんにセッティングを手伝ってもらったんです」と答えるが、当のアポロンはレナードの突っ込みを無視して花に訴えた。

「なあ、姫さん。これ美味いけどなんか指が黄色くなってきた気がする……」

「それは食べすぎです。あんまり食べ過ぎるとオネシヨしちゃいますよ?」

「バゝカ! 誰がオネシヨなんてするか! 今、俺様が何歳だと思ってるんだ!？」

「おいくつになられるんですか?」

「……………おい、レナード! ちょっとメレフィスに聞いてみてくれ!」

「バカか!?!? 自分の歳も数えられないバカの為になんでわざわざ

魔力使ってメレフィス呼び出さなきゃならないんだ、バカ!!」

「バカって何回言ってた!? バカ!! バカって言うほうがバカなんだよ! バカ!!」

「お前の方が言ってたんだろうが!! バカ!!」

「…………お前ら、いい加減出て行け」

それまで黙っていたルークが怒りを抑えた声で告げた。

その殺気さえ漂う気配にアポロンは押し黙り、花にすぐる様な視線を向けて言った。

「俺…………まだその箱の中身見てない…………食いもんなんだろう?」

そうして指差したのはコタツの上に置いてある三段重ねのお重。

「あ、じゃあもうすぐディアンも来るはずですので、せっかくなんでみんなで食べましょう。ね?」

ルークに向けて嬉しそうに微笑む花に、ルークは頷くしかなかった。

やがて、青鹿の間に「遅くなりました」と言いながらやって来たディアンは異様な光景に一瞬眉を寄せたが、すぐにいつもの暗黒笑顔でコタツに座るアポロンの首根っこを掴むと後ろに放り投げ、今までアポロンがいた場所に座った。

花は、人? がマンガみたいに飛ぶのは初めて見たな…………などと思いつつも、その後ディアンの後ろで正座して捨てられた子犬のようにならぬとして、アポロンが段々と気の毒になってきたのだ。

「あの、アポルオンさん……私、ちょっと詰めますからこちらに座りますか？」

「ダメだ」

花の提案にルークが間髪入れず口を挟んだ。

しかし花はシュンとしたアポルオンを見ていられず……

「私、ルークの隣に座ってはダメですか？少し狭くなりますけど……」

昔、沙耶に教わった必殺？上目遣いをお願いしてみた。まさか使う日が来るとは思わなかったが。

「……構わないが」

ルークの了承に、花は喜んで隣へと座った。すかさずアポルオンが空いた場所に座る。

ニコニコと嬉しそうにする花に、ルークも優しく微笑んだ。

「……熱いですね」

「そうだな……このコタツとやらが熱いのかな……」

ボソボソ呟くレナードとディアンの2人とは別に、アポルオンは待ちきれないようにお重に手をかけた。

「なあ、姫さん！開けてもいいか！？」

「はい、どうぞ」

そうして開けられたお重の中身を覗き、みんなが興味津々の様子で呟く。

「綺麗ですね」

「見た事無いものばかりだな」

「うわ！なんだこの赤いの？食べるのか！？」

「ハナ、これは？」

ルークの質問に花は嬉しそうに笑って答える。

「御節です。お正月の縁起物なんです。翔さんのお姉さまが作って下さったんですよ」

「……あいつに姉がいるのか？」

「はい、双子のお姉さまなんだそうですよ。お料理がすごく上手らしくて、すごく自慢のお姉さまらしいです。いつかお会いしてみたいですね？」

「……あいつの双子……それよりもハナ、いつの間にあいつとそんな話をしたんだ？」

「？ 結構前ですけど……翔さんって本当に面白い方ですよ？今回、お忙しいようでお会いできなくて残念でした。でもルークが手紙を渡してくれたおかげで、こうして私の国のお正月を迎える事ができてすごく嬉しいです。ルーク、ありがとうございます」

「……いや」

なぜか目を逸らすルークだったが、花は気付かずディアンへと視線を移した。

「ディアンもお忙しいのに、翔さんからの贈り物の受け取りを下さったんですね？アポルオンさんにお手伝いしてもらって助かりました。ありがとうございます」

「いえ、全然かまいませんよ？むしろ面白いものを見る事ができて楽しかったです」

ディアンの返事に不思議に思いながらも花は、さつきから変な咳をしているレナードに心配の声をかけた。

「レナード大丈夫ですか？」

「いや、大丈夫だ……それよりハナ、これがハナの国の風習なのか？」

「え？……そうですね、日本では……私の実家にはコタツはなかったんですが、憧れだったんです。それに御節はいつもどこかのホテルの物だったので、こういった手作りの物も憧れてて……」

そう言っただけで花は微笑んだ。

「そうか……じゃあその……実家が懐かしくなったり、帰りたくなったり……」

言い難そうに尋ねるレナードに花は更に笑みを深くする。

「そうですね……懐かしく思う事がありますけど、故郷は遠くにありて想うものです。私は帰りたいとは思いません。ずっとここにいたいです」

花はルークに向かってニツコリと微笑んだ。
それにルークも微笑み返す。

「やはり熱いですね、ここは……」

「そうだな……そろそろ帰るか……」

2人はそう言うのと立ち上がり御節をひたすら食べながら「うお？これすっぺー……お？こっちは甘い……この黒いのは豆か？」などと呟いているアポルオンの首根っこを、ディアンが掴んだ。

「それでは、私たちはこれで失礼致しますので、あとはお2人でしつぽりと……」

ディアンはそう言うと、アポルオンを引き摺ってレナードと共に去って行ったのだった。

「はい……？」

花はなんだかよくわからなかったが、それでもルークに向き直ると改めてお礼の言葉を口にした。

「こんなに楽しいお正月は初めてです。ルーク、本当にありがとうございました」

花の心からの嬉しそうな笑顔にルークは優しくキスで返すと、そ

のまま頬を染める花を抱き上げた。

「ルーク!？」

「……少し、抱きづらいな」

帯が邪魔をする為か、ルークは小さく呟きながら花を寝室へと連れて行く。

そして……

「……………ハナ、これはどうやって脱がすんだ？」

「え？」

軽く眉を寄せて聞くルークに花は赤くなり、そしてハッと何かを思いついたように口を開いた。

「ルーク!まさか……悪代官様がしたいんですか!？」『あれ』
「つてやつですか!？」……「ごめんなさい、あれはコントの中だけで
実際は『あれ?』くらいで終わってしまうんです。残念ですが……」

ルークには花が何を言っているのか全く理解できなかったが、残念そうにする花に「そうか、残念だな」と思わず返してしまった。
その返事を聞いて花は、やっぱりそういうのは男のロマンってやつかな?と思いつつ、今度代わりになる事を翔さんに相談してみよう、と決意したのだった。

年始企画 パラレルDEお正月。(後書き)

パラレルのようで、そうでもない・・・かも？w w

お楽しみ企画というより、ひたすら私が楽しんだ企画でした。

双子ちゃんを快く貸してくれたばかりか、のつてくれてありがとう♪
皆様もお付き合い下さいまして、ありがとうございました♪

リリアーナ*

リリアーナのつもりでしたが、どうにもこうにもダメですね。
アイタタタタ……

> i 1 6 4 4 4 — 2 1 3 4 <

妖艶さも何ありません。

色塗りしていると段々と雑になってきます。

背景にいたっては本当に適当なのをいれてます。すみません。

そして色々と苦手なのですが、一番の苦手は髪の毛です。
すごい苦手です。艶も出せません。

うーん、上手くなりたいな……色々と……

ちなみに女の子の胸は大きいのか描けません。
よって、花は描けません（爆）

花っちは、よせてあげて言い聞かせてますから。

……と、言いつつ、本人が気にするほどではないんですがね……
周りがかいんです。ユシユターの女性は魔法でも使って大きく
してるのかも？

リカルド*庭子さまバージョン

鶏 庭子様から頂きました♪

リカルド!!

> i 1 6 6 0 7 — 2 1 3 1 <

も、ええわゝ。

男らしいのに、甘い感じがしませんか？

なんていうか、色気があるよね？え？見えない？んな馬鹿な!!

私の大好きなタイプなのです!!見た目がww

皆さん、お気づきかもしれませんが、もりは密かにリカルドが気に入っているのです。

なぜって？

それは・・・アレだからです。もうね、リコはアレの為に生まれたキャラなので作者的に気の毒で気の毒で、同情せずにはいられない!!（原因は私だけどね!!）

で、アレってのはまだ謎です（笑）でも、もうすぐわかるはずですよゝこれのため？みたいな・・・

そしたら皆さん、リコに同情してあげて下さい。キスくらいいいじゃないか・・・アレなんだからww

イメージ崩壊 パラレル小嘶 その1。 (前書き)

ひたすらイメージ崩壊（イメージを持っいて下さったんですが）
のパラレル小嘶ですのでご注意ください！！

イメージ崩壊 パラレル小噺 その1。

リコッリ ザックザ トールドット

ザ「殿下！！大変です！！ターダルト王国で騒乱が起こっているようです！！」

リ「何！？あそこの治世は今安定していただろ！？いたいなせ・・・」

ザ「なんでも、国名のターダルトに不服があるとかで・・・」

リ「ターダルトに？」

ザ「なんでも、作者が名前に困ってその時食べていた『ハタダの栗タルト（会社名&商品名）』をもじって付けたのが気に入らないと！！」

リ「何！？そんな事でか！？それを言うなら、我が王国の王都コステイは作者が鼻かんでいたティッシュのスコッティから付けられたんだぞ！？」

ザ「マジですか！？」

ト「ふっふっふ。それを言うなら・・・」

「「トールド！！？」」

ト「私なんて、作者がザックの相方ならコーディ（知る人ぞ知る）

だろって事で危つくコーディネートになりそうになったんですよ？」

ザ「ええ！？あの、ハナ様の護衛の空気読めないコーディネートか！！？」

リ「いや、お前が言っな、お前が……」

ザ「殿下！！失礼です！！私は読めないんじゃないで読まないんです！！」

「「……」」

リ「……ま、まあ、よかったな、トールドになって……」

ト「何がいいんですか！！？ザックなんて名字まであるのに私は名前だけ！！し・か・も！！名付けに悩んだ作者の、その時飲んでいた『ドールのカフェ・ラテ』から付けられたんですよ！！！」

「「ドール……トールド……」」

リ「……ま、まあ、よかったな、ラテカフェじゃなくて……」

ト「よくありません！！私だって名字が欲しいんです！！！」

ザ「じゃあ、『トールド・ラテカフェ』でいいんじゃないか？」

ト「……ふふふ……ふふふふ……ちょっと自分が『ザッカー・マルケス』なんて正式名称持つてるからって……立派なお名前をお持ちで羨ましいですね」

ザ「ま、待てトールド！！そのでかいハサミはなんだ！？」

ト「立派でござ自慢のお名前をお持ちのマルケス殿には、他のござ自慢のモノなんていないでしょう？」

ザ「いるつつつの！！何言っただ！？……やめろ！！落ち着け！！そのハサミを置け！！……殿下助けて！！！！」

リ「……よかった、俺も言わなくて……」

花「何をですか？」

リ「ハナ！？……いつの間にいたんだ！！？」

つつく。

イメージ崩壊 パラレル小断 その1。(後書き)

はい。アホですみません。以前、活動報告でやってたものの続きですww

なのに、更に続いてしまうようです・・・たぶん。

ルーク&花*なのか？

気分転換に描いたものの・・・どうにもこうにもアレですわ・・・

> i 1 7 2 2 6 — 2 1 3 4 <

これ以上ペン入れたら、崩壊する・・・イメージが崩壊する・・・とか言いながら、逃避ついでに適当に色塗っちゃいました（アイタタタ

イメージ的にはなんだか、花は小さいイメージをお持ちの方が多いかと思いますが、最初にあるように花の身長は164センチです。意外と大きい？です。

でも、細いです。しかも、なんだか花は作中でブサイク扱いを受けてるような気がします。あくまでも十人並みです。ちゃんと化粧すれば、本人も言ってるように「それなり」ですww

ルークの身長は明言はしていませんが、イメージ的には183センチくらいかな？転移ばかりで歩くこともしないのに、体格がそれなりにいいのは・・・

密かに自室にダンベルとか置いて鍛えてたりしたら笑えますが・・・嘘です。実は隠れ設定？として、ルークはレナードと剣の稽古とかしてます。剣も実は扱えます。ってか、強いです。

ちなみにディアンは若い頃はレナードの稽古に付き合ってたので、それなりに扱えますが、今は断然レナードの方が剣では強いです。でも迫力で負けますww

だけど結局、剣で一番強いのはジャスティンだと思います。未だに

ジャスティン最強です。いつかジャスティンの話も書きたいな〜と
思いつつ・・・本編をなんとかしますw w

リリアーナ*れんじょうさまバージョン

というわけで、れんじょうさまに描いて頂いたリリアーナ姉さんです♪

ありがとうございます!!

> i 1 7 1 8 4 — 2 2 7 5 <

色っぱいなー。艶っぱいなー。

色なしで、携帯撮影でこの色っぱさww

やっぱり経験がものを言うのか・・・

→

なんのだよ!!ww

魔族の男性は羊のような角?があつて、シツポはありませんww耳は・・・どうなってんだろうね・・・その辺適当で(オイ!!

魔族の女性はリリー姉さんみたいに、猫耳&シツポですが、色は黒と決まったわけではありません。

ちなみに、金色の瞳は魔力の強さを表しているので、魔族全員が金色と言うわけではなく、銀色もいます。銀色の彼は・・・本編では出ないかなあ?

魔族や魔宝の謎も明かしていきたいのですが・・・本編に組み込めるように頑張ります!!

れんじょうさま、本当にありがとうございました!!

おまけ番外編 剣とジゴロ。(前書き)

ギャラリーを覗いて下さった方へのお礼の番外編です。隠しコマンドみたいですねw

本編に載せるには短すぎるので、こちらで。いつか、本編に組み込むかもしれませんが・・・

おまけ番外編 剣とジゴロ。

「ジャステイン、悪いが宝物庫へ付き合ってくれ」

近衛騎士であるジャステインは訓練を終え、昼食のために騎士達の食堂へと向かいかけた所で、兄であるセインに声を掛けられた。

「これからですか？ 構いませんが……私一人だけでよろしいのですか？」

宝物庫では、最近不穏な出来事が起こっていた。

それゆえ、共にジャステイン一人で大丈夫かと問うたのだが、セインは笑って答える。

「ハハハハハ！！ お前で無理なら、何人いても変わらんさ」

ジャステインは帝国一の騎士であり、この国でジャステインより強い者は二人しかいない。

皇帝と皇太子だ。

だがそれも、魔力で勝ると言うだけで、実際に剣を手に戦えば、その結果がどうなるかはわからない。

そうして宝物庫へと踏み入った二人だったが……。

「特に変わった様子はないですね」

ジャステインの言葉にセインは頷いた。

最近、用あってこの宝物庫に足を踏み入れた者達が次々と倒れて

発見されるのだ。

その者達は、不思議なことに魔力を残したまま、皆一様に恍惚の表情を浮かべているらしい。

セイン達はその変事を調べに来たのだった。

そして、少し奥へと進んだ所で、突然ジャスティンが険しい顔つきで振り向いた。

一拍遅れてセインも振り向き、その顔を恐怖に引きつらせる。

二人の視線の先にいるのは、紛れもない魔族。

しかも強大な魔力を誇示するかの様にその瞳を金色に輝かせていた。

「いっやゝん♪ めっちゃ美味しそうなんが二人もいるうゝ!!」

嬉しそくに言う魔族の女に、セインは更にその顔を引きつらせ青ざめたが、ジャスティンはニツコリと微笑みを向けた。

「おや、まさかこんな所で、貴女のように素敵な女性に出会えるとは思っていませんでしたね」

「……え？」

ジャスティンの思わぬ言葉に、セインだけでなく魔族の女も驚き声を上げた。しかし、ジャスティンはそんな二人に構わずに更に笑みを深くして続ける。

「お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

「リ……リリアーナやけど……」

「ああ、お姿だけでなくお名前も美しいですね。貴女にピッタリで

す」

そう言って極上の笑顔を見せたジャスティンだったが……。

―ズキュンッ！！↓

「ん？ズキュン？」

聞こえるはずのない音に首を傾げたセインが瞬きして次に目にしたのは、リリアーナと名乗った魔族がジャスティンに絡み付いている姿だった。

攻撃を受けているのかと、一瞬疑ったセインだったが、それはすぐに間違っていたと悟る。

「いや〜ん！！うち、心臓^{ハート}を撃ち抜かれてしもうた〜！！騎士様のお名前はなんて言うん？」

「ジャスティンと……ジャスティン・カルヴァと申します」

冷静に答えながらジャスティンは絡み付いたリリアーナの肢体を自身からテキパキと引きはがしていく。

「いやん♪ジャスティン様のいけずう〜。でも、まあええわ。うち今日からジャスティン様の剣になるわ！！もう、縛られるのにも飽きたしなあ」

「……剣？」

今度はセインとジャスティンが驚きの声を上げた。
それに応えるようにリリアーナは宝物庫の奥で封じられている（

はずの）剣を指し示す。

「貴女は剣に宿られているんですか……」

「うん」

納得したようなジャスティンに、リリアーナは嬉しそうに答えた。
そしてセインは更に納得したような声で呟く。

「それもそうか……陛下の結果が張られたこの王宮……宝物庫に魔族が侵入出来るわけがないしな。まあ、今の陛下のお力は皇太子殿下より――」

「兄上――！」

独り言の様なセインの言葉はジャスティンの厳しい声に遮られた。

「あ、ああ……すまない」

セインは謝罪の言葉を口にしながら、誰もいないはずの辺りを見回した後、ジャスティンへと目を向けた。

「で、その魔剣をどうするんだ？」

いつの間にかリリアーナは姿を消し、魔剣としてジャスティンの手の中に納まっている。

ジャスティンは大きく息を吐き出して答えた。

「兄上が陛下にご報告される折に、私も供します。そしてこのリリアーナをお借り出来るようお願い申し上げるつもりです」

「……そうだな、私も今回の事はよくわからんから、その……直接彼女が陛下に面してくれた方が早いだろうな……しかし、お前……騎士を廃業してもジゴロとしてやっていけるな……」

セインの冗談混じりの言葉は、珍しく怒りを含んだようなジャステインに否定された。

「ジゴロなど……女性の敵ではないですか！！そんな者、私が全て排除しますよ」

全く自覚のない弟に、セインは大きく溜息を吐いたのだった。

おまけ番外編 初めての贈り物。(前書き)

皆様、いつもありがとうございます。
今回はかなり短い、おまけ番外編です。

おまけ番外編 初めての贈り物。

「レナード、たんじょうびおめでとっ」

ディアンは祝いの言葉と共に、両手で抱える程の大きな箱を差し出した。レナードはそれを、戸惑いながら受け取る。

「え……でも、ボクなにも……」

今日はレナードの五歳の誕生日だった。と言う事は、ディアンの誕生日でもある。

ディアンへの誕生日プレゼントを何も用意していないレナードは今にも泣きそうな顔をしていた。

「レナード、ボクはレナードの兄だから、とうぜんなんです。でも、レナードは弟だから気にしないでいいんです。そのかわり、ちゃんと兄のボクの言うことをきいて下さいね」

「うん！ わかった！！」

「やくそくですよ？ これから一生ですからね？」

「うん！ ぜったい！！」

「……」

レナードの元気のいい返事に、嬉しそうに微笑むディアン。

そんな二人のやり取りを無言で見ていたルークは、五歳になったばかりの子が見せるものではないディアンの微笑みに、この先のレ

ナードの人生を気の毒に思った。

「これはずっとレナードがほしがってたものですから、がんばってボクが作りました」

ディアンはそう言うのと、メーシプに用事があるからと、部屋から出て行ってしまった。

一方のレナードはワクワクした様子で箱を開け――。

固まった。

その様子を不思議に思ったルークは、レナードへと近づいて箱の中を覗き……………持っていた本を落とした。

ルークはそのままそつと静かに後じさり扉まで行くと、そつと静かに部屋から出て、ゆっくりと扉を閉めたのだった。

「ぎゃあああああああああああ!!!」

その後、ユース侯爵家の敷地を出て、王宮へと戻る途中の馬車の中にまでレナードの悲鳴が届いた時、ルークはレナードの為に祈らずにはいられなかったのだった。

おまけ番外編 初めての贈り物。(後書き)

ディアンは5歳ですが、かなり大人びた子でした。そしてルークも4歳半ですが、色々と悟ってますww
子供らしい、子供はレナードだけでした。

バレンタイン企画 パラレルDEはじめまして。 (前書き)

皆様、いつもありがとうございます。
再びコラボです。けっこう長いです。

バレンタイン企画 パラレルDEはじめまして。

「およ？ ここどこだ？」

寝室にある長椅子で本を読んでいた花は、突然聞こえた男性の声に驚いて振り向いた。

そして暖炉の中から現れた男性を見て更に驚く。

本来なら暖炉から男性が現れた事に驚くべきなのだろうが、花には一度経験がある為か、その事ではなくその男性の姿に驚いたのだった。

黒髪・黒眼のその男性は、少し灰によって煤けてしまったダウンジャケットに、ジーンズとパーカー、その上なぜか日本刀らしき物を腰に佩いているのだ。

「あの……」

なんとか声は発したものの、それ以上言葉が続かない。そんな花と目が合った男性は、顔を顰めて頭を抱えた。

「うつわ、間違えちゃった！！ こっそり忍び込んでルー君の寝顔激写して生写真売ろうと思ったのに！ 女の子の部屋に侵入だなんて僕まるで変態じゃんっ！！」

屈みこんで叫ぶ男性の言葉に花は耳を疑った。

「……日本語？」

今まで、この世界に届けられてから何気なく耳にし、話していた

言葉が異世界語である事を花は改めて意識した。
驚きのあまり呟いた花の言葉に、男性は顔を上げて不思議そうにした。

「あれー…… ひょっとして僕、世界自体間違えた？ おおお……
久し振りでたつたからなあ。ユシユターでマグノリアじゃないのか？ 最後まで迷ったムツシユダーヨでマグノリベンだった？ また迷子だ僕！ どうしようどうしよう、どうもしないけど！」

一人まくし立てる男性を呆気に取られて見ていた花は、再び男性と目が合ってしまった。

—— …… ど、どうしよう？何を言えればいいのか……とりあえず、間違っていない事を教えた方がいいのかな？

この突然の侵入者に花は不思議と危険は感じなかったのだが、どう反応すればいいのかわからない。

困ってしまった花に男性は立ち上がると、気の抜けるような笑顔を見せた。

「えー、取り乱しました…… コホン。改めまして、僕は翔。明らかに不審者だけど気にしないで？ んでさ、ここってどこ？」

自己紹介？と共にペコリとするその仕草が日本人らしくて、花は思わず笑顔を返した。

「はじめまして、小泉花といいます…… あ、今は違う？……とにかく、花です。翔さんは間違っていないようです。ここはユシユターのマグノリアと言う国ですから」

「な〜んだ、間違えてなかったんだ。さっすが僕だねっ！……って、あれ！？ 花ちゃんって日本人…… だよね！？ じゃ、トリッパーなの！？」

「トリッパー？」

「異世界をトリップする人の事だよ。僕はパシ…… いやいや、趣味と実益を兼ねてあちこちの世界をトリップしてるトリッパーなんだけど、花ちゃんは？」

耳慣れない言葉によって知った翔の特技？に驚きつつ花は答えた。

「……いえ、私はたまたまこの世界に……」

「そつかー。『落ちた』のかあ…… あ、じゃあさ、元の世界に帰りたい？ 僕、頑張れば帰してあげられない事もないけど？」

「いえ、それは大丈夫です。ご心配下さってありがとうございます」

ニッコリ微笑んでお礼を言う花に、翔もニッコリ笑い返す。

「うん、それならいいんだ。にしても…… さては花ちゃん、この世界に好きな人ができたなあ？」

「え！？」

顔を真っ赤にした花を見て、翔は楽しそうに声を上げる。

「だいせいかいー！！」

「い、いえ……あの！翔さん、それにしても、どうして暖炉から現れたんですか？今日はたまたま暖かいので、火は入ってなかったですけど……」

「うわ、マジで！？あつぶねー！まるでなんかのコントみたいじゃんっ！素でギャグ出来るなんて……でもちよつとオイシイ。ってかさー、定期的に僕ってあわてんぼうのサンタっぽいね？いよっ！メリークリスマス！あれ？なんか掛け声おかしい？」

恥ずかしくなつて慌てて逸らした話に応える翔がおかしくて、花は声を出して笑った。

とても若いイケメンサンタだ。

それから翔は、「そうだ、いいものあげるよ」と言うと、ゴソゴソとジャケットの左右のポケットを探った。

「ジャジャーン！！郷土料理ですー！」

弾んだ声で翔は花に手を差し出した。

その手のひらに乗っているのは、かわいくラッピングされた小さな包み。

「これは？」

「バレンタインチョコですー！」

「え！？それはダメです、頂けません」

「なんで？あ、この世界にもチョコってあった？」

「いえ、ありませんけど……バレンタインのチョコレートなんて頂

いたら申し訳ないです」

「…… ああ！！ 大丈夫、大丈夫！！ これ、姉ちゃんから貰ったもんだから。しかも、まだあるし。姉ちゃんの手作りなんだけどさ…… あ、姉ちゃんと僕って双子なんだよ。んで、姉ちゃんはおめちやくちや料理が上手いの！！ んで、人に食べさせるのも好きだから、花ちゃんが貰ってくれたら喜ぶよ？ 絶対！！」

花が遠慮する理由に思い当たったらしい翔は、安心させるように説明をしてくれるのだが、花はその中に何度も出てきた『姉ちゃん』という言葉に、翔さんはお姉さんが大好きなんだな、と思いクスリと笑った。

同時に、翔の手のひらでチョコレートが花を誘惑する。

「あの…… 本当に頂いてもいいんですか？」

「もちろん！！」

「…… じゃあ、遠慮なく。ありがとうございます。本当はすっかり欲しかったんです」

包みを受け取って嬉しそうに微笑む花に、翔も満足して笑うと「よしっ！！」と気合を入れるように、自身の頬を叩いた。

「んじゃ、僕帰るわっ！！」

そう言って手を振る翔に花は慌てて声をかける。

「あの！！…… 翔さんは結局、マグノリアに何をされに來られたんですか？」

「……………あ」

当初の目的をすっかり忘れていたらしい翔に、花は再び笑った。しかし翔はその事さえも全く気にしてないようで、「そうだった、そうだった」と呟いている。

「ねー、花ちゃん。この辺にさ、ルー君とレナードっていう愉快な仲間達…… ああ違った、萌えと愉快だ。じゃなくて、残念な年齢のかつちよいーお兄さん達いない？」

「……………ルー君とレナード？」

—— レナードって……レナードの事かな？って事は、ルー君ってルーク？ルーク……ルー君……ルー……

「……………カレー」

考えるうちになぜかカレーが食べなくなった花は思わず呟いてしまった。

「カレー？」

「はい。なんだか、急に通ってた大学の学食のカレーライスが食べたくなって……」

「わかるわかる！！ カレーは『急に食べなくなるランキング』上位だもんね！あとラーメンと！ 現代っ子のソウルフードだ！」

「そうなんですよね！！私、この世界に不満はないんですけど、で

もたまに、無性に学食のカレーライスとか、ラーメンも食べたくな
ってしまふ時があつて……あとはやっぱり白いご飯ですよね？もう
私、何度チネろうかと……」

「えー！！ 花ちゃんってチネラー！？ あ、まだチネった事はな
いのか。僕もやってみようかと思つた事何度もあるよ？ でも二粒
が限界で『もういいっ』って食べちゃうんだ……」。

「だけどやっぱり僕は姉ちゃん料理が一番だねっ！ 姉ちゃんの力
レーは絶品だよ？ 香辛料から作る本格カレーの時もあるし、市販
のルーの時もある。なんでも『ヘタに作るより日本のルーは美味し
いから』だって！

「あー花ちゃんにも食べさせてあげたいなあ…… でも、そうだな
…… ンじゃさ、今度来る時に姉ちゃんのは無理だけどレトルトの
カレー持つて来るよ！ あと、米も！！」

「本当ですか！？ 嬉しいです。ありがとうございます！！」

「うん！んじゃ、僕帰るね！！」

「えー？あ、すみません！！……話を逸らしておいて何ですが、レ
ナードとルー君は？」

「……………あ」

再び当初の目的を忘れてしまつていたらしい翔に、今度は二人で
笑つた。

「あの……ルー君って、ルークって言うんじゃないですか？」

ひとしきり笑って落ち着いた花の問いに、翔は嬉々として答える。

「そうそう！…… 多分？ ルー君としか思い出せないんだけど。
うーん、見た目はズバリ『乙ゲーの難攻不落キャラのような銀髪の
美形』！」

「……それなら、やっぱり翔さんは間違っていないです」

なぜか顔を赤くする花を見て、翔はピンときたようだ。

「あ…… ひょっとして花ちゃんの好きな人ってルー君！？ うっ
わー！ …… って、ひょっとしてルー君ってば、花ちゃんと一緒に
部屋で寝てたり！？」

もはや、ゆでダコ状態の花に、翔は再び頭を抱えた。

「あつぶね！ もうちよつとでイケナイ現場に遭遇する所だった！
そんなところ見られたらルー君のルー君がルー君になっちゃうあわ
わわわ。 お邪魔虫ったら消し炭にされるとこだった！ ひよえ」

「—— それなら今すぐ消してやる」

「……へ？」

突然聞こえた声に翔は素っ頓狂な声を出し、花は後ろから強くル
ー君に抱きしめられた事に驚く。

「ルーク！！」

「ルー君！！」

どうやらルー君を驚かそうと気配を消してコッソリ現れた翔だっ

たが、話が弾んで油断したらしい。

ルークはその気配を感じ、侵入者を排除しようと急ぎ現れたのだが、翔を見て何かを思い出したように呟く。

「お前……」

が、それに構わず翔は喜び？の声を上げた。

「うつわ！ ルー君久し振りー！ 相変わらず美形だねっ。お友達の翔だよ……。…… お、覚えてる！？ 覚えてるよねっ！？……。…… あ、無反応？ やば、ひよつとしてだいぶ時間あいたもんで年齢による記憶障害起きてる！？ だめだよ、ちゃんと脳トレしないとさっ！ まあいいか。ねー、突っ込み担当レナードいないの？」

「……」

無言だが、ルークの静かな怒りを感じた花は慌てて口を挟んだ。

「あ、あの……。ここでは何ですから、居間にでも？」

「あ！ そだね……。花ちゃんとルー君の愛の巣で語り合うのは僕の命が縮まるし？ んじゃ居間いこー！」

「……」

「ルーク？行きましょう？」

まるで勝手知ったるかの様に居間への扉に向かう翔の後を追って、仕方なくといった様子のルークと花は居間へと向かった。

そして花が居間に入った途端、「怪しいけど怪しくありません！」

と言って両手を上げる翔と、剣を構えた護衛のカイル、驚きに青ざめているセレナ達が目に入った。

「あ……」

いきなり花の寝室から見知らぬ男が出て来たのだから、カイル達の反応は当然なのだが、その事を失念していた花は何と説明すればいいのかわからず言葉に詰まってしまった。

そんな花の後ろから、盛大な溜息が聞こえる。

「カイル、こいつのことは気にするな。色々と規格外だから今回の事は忘れる。それと、レナードを呼んでくれ」

「えー、ナニソレー。ルー君って僕に対して扱い雑じゃね？ わっ、キレーなお姉さん達みっけ！ 初めましてー。僕、翔です。よろしく？」

翔はルークの言葉に文句を言ったかと思ったら、すぐにセレナ達へ挨拶して勧められもしないのにさっさと応接ソファへと座った。そんな翔に、花は笑いを堪えてセレナ達にお茶を頼むと、無表情だが明らかに怒っているルークと共にソファへと腰を下ろした。

「そっいえば翔さん、今は日本語じゃないですね？ さっきまでは日本語で話していたのに」

「それを言うなら花ちゃんもだけどね？ まーいいじゃん、うまいことなってるんだから。キニシナイ」

「それもそうですね」

「何の話だ？」

二人の会話を聞いて訝しそうにするルークに、花は答えようとしたが……

「あの――」

「ん？ルークなにになに？嫉妬やキモチじえらすい？あははやだな、心配した？あのさ、僕と花ちゃんは同じ世界の同じ国に住んでたんだよ。びっくりだよー！偶っ然！」

「……と言つ事です」

「……」

勢いよく簡潔に？説明する翔に圧倒される花だったが、やはりルークは怒っている。そんなルークに、翔は更に言い募る。

「うを、ますますジエラってる……怖っ！ねね、花ちゃん、男の嫉妬は好き？萌え？でもさ、それ表に出すとちよつとかつちよ悪いよね？」

「はあ……」

「……」

花にはもはや、何をどう言えいいのかわからない。

だが翔は、静かに怒るルークを楽しそうに見ると、何かイタズラを思いついた子供のように顔を輝かせた。

「そっいえばさ、花ちゃんってバレンタインチョコ、誰かにあげた

「ことある？」

「え！？……まあ、あることにはありますが……」

父親と兄弟に義理チョコを一応毎年贈っていた。

父親には書斎の机の上にいつも置いておいたのだが、恐らく食べてくれた事はないだろう。兄弟達に関して言えば、家政婦さん伝^{つて}にお願^{ねが}いしていたので受け取ってくれているのかもわからない。

それでも、あげたことになるかな？と思いつつ花は答えたのだが、それを聞いた翔は非常に嬉しそうな顔をした。

「へー、ほー、そーなんだあー！ ルー君^{くん}つてば聞いてよ！ バレンタインのチョコ^{チョコ}つてのはね、出身地では一大イベント……祭り？なのさ。『女の子が好きな男にチョコ^{チョコ}をあげて愛を伝える』つてね！ ほっほー、花ちゃん……ねえ」

「え？あ、はい。そうですね」

深く考えずに答えた花は、ルークの気配……というか、王宮に満ちる魔力の圧力が増した事に気付かない。

「……レナード、いい加減に入^{はいり}って来い！」

怒りを含んだようなルークの声に驚いた花だったが、その言葉に応えるようにゆっくりと青鹿の扉が開いた。

そして現れたのは、非常に嫌そうな顔をしたレナードと、非常に楽しそうに微笑むディアン。

「あれ？いつからいらっしゃったんですか？」

「陛下の嫉妬心について話されている少し前からです」

爽やか暗黒笑顔のディアンのおかげによると、カイルがレナードを呼びに行つてすぐと言う事だ。

「んっ？ なに！？ レナードが二人？ …… いや違うな、実体化した天使と悪魔だ！ きつと僕の左右に現れて悪魔が誘惑して天使がそれを邪魔するに違いない！ いやいや、それともレナードがものつすごい高速で動いていて残像が見えてるだけなのかも！？ どちらにしても楽しいな、うんうん」

「どっちも違うわ！！…… お前は久しぶりに会って挨拶も無しに言う事がそれか？ こっちは俺の双子の兄のディアンだ」

天使と悪魔、言い得て妙だと花は感心していたが、二人の絶妙な掛け合い？ は続く。

「なんだレナードのおにーさんか。僕は翔！ 趣味は迷子！ ああ違う駄目だよ自分で言っちゃ……。ディアンおにーさんってステキな暗黒オーラが見えてうつとりしちゃうな。そういうの大っ好き！ …… なんてレナードはハラハラしてるのか分かんないんだけど……？ あ、そうか、うんうん。ね？ ディアン色々よろしく！」

元気良く両手でディアンの手を握ってぶんぶん振る翔に、レナードは蒼白になった。

「カケル！！——」

慌てて止めに掛かろうとしたレナードだったが、ディアンの顔を見て足を止めた。

ディアン顔には、前回の翔の訪問をメーシプから聞いた時に見せた氷の微笑みが浮かんでいたのだ。しかし、翔はディアン微笑みに嬉しそうに笑い返す。

なぜだか、何か二人が通じ合ったような気がしたレナードは一歩後じさった。そんなレナードに翔は脱力するほど気の抜けた笑顔を向ける。

「レナード！ いやー、暫く見ないうちに大きくなったね！……多分？ 僕に会いたくて恋しくて堪らなかった？ 寂しがり屋さんだなあ、こいつう！ まだ独身？ 一人寂しく冷たいベッドで枕濡らして寝てるんだろ？ ふふん、今日は僕が寂しくないように添い寝で子守唄を歌ってあげよう！」

「いるか！！ お前、アレを『歌』だなんて、よくも——」
「レナード」

二人の掛け合いを面白そうに見ている花と、黙ったままドス黒く笑うディアン。

しかしルークは、楽しそう？なレナードの言葉を静かに遮った。

「どうでもいいから、早くこれを持って出て行け」

「うつわ、何！ 僕『これ』扱い！？ 酷いわっ！ ルー君、僕の事もあそんで捨てるのねっ！ 僕はもっとルー君で遊びたかった…… あ、違う。ルー君と遊びたかったのに！ ねえ花ちゃん酷いと思わない！？」

「え？そうですね？」

「……」

益々ルークの纏う気が圧力を増したのを見て、翔はいつそう楽しそうに笑った。

「おおっと！ これ以上ここにいちや恐怖の大王が降臨するう！ ヤバイヨヤバイヨ。これにてドロソ致しますっ！ ささっ、レナード行くよっ！どっかに！どこだよっ！？まあいいや、じゃー花ちゃんまったねー！ 約束のアレお楽しみにー！」

「え？おい！？」

言いたい事だけ言った翔は、驚くレナードを引き摺って青鹿の間から出て行った。その後を暗黒笑顔のままのディアンが続く。それを見送った花はレナードの為に祈らずにはいらなかった。

そして残ったのは、微妙な空気の静寂。

「……………」

—— 何て言うんだろう……………一難去つてまた一難？全然違う。嵐の前の静けさ？あ、意味逆だ。嵐が過ぎ去ったような……………台風一過？うん、そうだー！うん……………まるで台風のようにした……………

「……………約束のアレとは何だ？」

不機嫌を隠さないルークの問いに、黙り込んで考えていた花は我に返った。

「え？ああ……………翔さんが、今度いらっしやる時に故郷の懐かしいものを持って来て下さるそうなんです。翔さんって、面白くて素敵な方ですね」

微笑む花を見て、これ以上ない程にルークの気が圧力を増した。
王宮のどこかで悲鳴が上がっている。

しかし、花はそれに気付かない。

「ルークに翔さんのようなお友達がいるなんて知りませんでした」

更に続いた花の言葉に、ルークは非常に嫌そうな顔をした。

「……友達などではない。あれはレナードの……」

「レナードの？」

「……担当だ」

「担当って……なんですか、その飼育担当のような言い方は……」

思わず突っ込みを入れた花だったが、ある事に思い当たりハツとした。

「もしかして、異世界人には担当が付く決まりなんですか！？ルークは私の担当だったんですね！？……それで私の面倒を見るはめに……」

「え？いや……」

相変わらず突拍子もない考えに辿り着いた花に驚いたルークは、思わず返事に詰まってしまった。

実際、花の事を最初は珍獣のように思っていたのだ。

そんなルークの動揺をよそに、花の思考は暴走していた。

—— やっぱり!! とうりでおかしいと思っただ!! そっかあ、
そうだったかあ……あれ? と言う事は……

「ルーク、ごめんなさい」

「……何がだ?」

「翔さんはご自分でお家に帰れるようですので、レナードの負担は少ないですけど、私は居座っちゃいました。貧乏くじを引かせてしまいましたね」

「……」

滞在時間が短くても、恐ろしい程の気力・体力を奪っていく翔は間違いなく貧乏くじだ。

前回の闖入—— 訪問で残っていた翔の置き土産の後始末には苦
労した……レナードが。

結局、ジャスティンの力を借りなければならなかったのだ。

押し付けたのは自分である事をすっかり忘れて、ルークはレナードに同情した。

そしてルークは小さく息を吐き出すと、申し訳なさそうにする花を抱き寄せて膝の上に乗せた。

「ルーク!?!」

驚き真っ赤になった花の顔を両手で包み、ルークはキスをした。

軽く、深く、何度も。

やっと唇を離れたルークは、恥ずかしそうに俯く花を抱きしめて囁いた。

「当たり前くじの間違いだろ？俺はハナが居座ってくれて、これ以上ないほど嬉しい」

ルークの温かい息がうなじにあたってくすぐつたい。
だが、次にルークが口を開いた時には、その声に少し不安が滲んでいた。

「俺はハナにずっとここにいて欲しい。俺の傍に。だがハナはカケルに会って……故郷に帰りたくなったか？」

「——いいえ……確かに、懐かしくは思いました……でも、帰りたいとは思いません。私はずっとここに、ルークの傍にいたいです。私の担当がルークで本当に嬉しいです」

「……」

花はルークに腕をまわしてギュッと抱きついた。

「私は、カレーよりルークが好きなんです」

「ハナ……」

「ラーメンよりも」

「……」

ルークにはカレーもラーメンも全くわからない。
だが、花を強く抱きしめながらも、喜ぶべき花の言葉をなぜかルークは素直に喜べなかったのだった。

バレンタイン企画 パラレルDEはじめまして。（後書き）

ルークにここまで言えるのは彼しかない！！って翔っちですが、彼は『鶏庭子』様の『世界を翔ける』の登場人物です。そして、あちらでもコラボってますwwしかも本編で！！さすが翔っち！！この後のレナードの運命は・・・もうお分かり頂けますよね？ww活字にするのが気の毒でwwとにかく、レナードに幸あれ。

花*娜柚霸さまバージョン

娜柚霸さまに花のイラストを描いて頂きました♪

ありがとうございます!!

まあ一先ず、見て下さい!!

> i 1 8 6 6 5 — 2 1 3 4 <

かわいいでしょ?かわいいでしょ?かわいいでしょ!!!? (しっこい)

十人並みの花には些か可愛すぎる・・・いや、これくらい可愛いのです。ルーク目線では。

この笑顔はルークの前でしか見せない笑顔でしょうね。

元々、文章力のなさからあまり人物の描写ができていないのですが、花は黒目がちで瞳は大きく、睫毛も長いです。色白だし、じゃあ何が・・・ってのが花の鼻の低さ(小ささ)ですかね。プププ。

花は鏡の前でいつも「あと1センチ私の鼻が高かったら歴史が変わったのに・・・」なんて・・・思ってはいませんが、悩みの種ではあります。

話は変わりますが、誤字脱字の多い私ですが、最近よくやるのがルークが(他の人物も)花の事を「ハナ」って呼ばなきゃならないのに「花」って呼んでしまってる事ですね。

ルークの告白シーンなんて、いっぱい「花」って呼んでましたよ・・・愛の力で漢字呼びなんです・・・と言い訳しながら修正しました。

でも絶対に「鼻」とだけはならないように気をつけています。

・・・が、もしやってしまったら何よりお知らせ下さると嬉しいです。もちろん他の誤字脱字、変換間違いなど・・・

娜柚霸さま、本当に素敵な可愛いイラストをありがとうございます！！
た！！

おまけ番外編 蛙の親は蛙。 (前書き)

いつも、ありがとうございます。

今回も超短い番外編です。

『初めての贈り物。』の続編？になります。

おまけ番外編 蛙の親は蛙。

「ぎゃあああああああああああ！！！！」

レナードとディアンの五歳の誕生日、ルークが王宮へと戻る途中の馬車の中にまで届いたレナードの悲鳴は、当然ユース侯爵家に響き渡った。

それまで、息子達の誕生日のサプライズパーティー準備の指揮を取っていた双子の父親であるユース侯爵は、愛する息子のただならぬ悲鳴に慌てて駆け出した。

それを見送ったアンジェリーナとメーシプや使用人達、そして……ディアン。

「母上」

「なあに？ ディアン」

「今日はボクとレナードのたんじょうびです」

「そうね」

「たんじょうびにパーティーを開いてもらっても、ちつともおどろきません」

「そうね」

「しかも、目のまえでじゅんぴをされては、おどろけません」

「そうね」

「どれくらいおどろいたフリをすればいいですか？」

「そうね……今のレナードくらいは？」

「むりです」

「そうよねえ……では、今のあのくらいは？」

「……てんいを忘れて走り出すくらいですか？ それもむずかしいです」

「そうよねえ……」

などと、一方の親子が会話している頃、もう一方の親子は……。

「レナード！！ 無事か！！？」

ユース侯爵は、レナードの悲鳴が上がった部屋の扉を勢いよく開いて飛び込んだ。

そして――。

「ぎゃああああああああああ！！！！」

屋敷中が振動するほどに絶叫した。

「……ディアン、あなたいつたいレナードに何を贈ったの？」

「え？ それは――」

答えかけたディアンの前に、ユース侯爵が転移して現れた。
その顔は酷く青ざめ、呼吸も荒い。

「父上……だいじょうぶですか？」

「……」

「あなた、レナードは？」

「……あ？ ああ！！ しまった！！！」

アンジェリーナの問いに我に返った？ ユース侯爵は、再び駆け出した。

「……母上」

「なあに？ ディアン」

「二人のきゆうしゅつに向かったほうがいいでしょうか？」

「そうね」

そうして親子はもう一組の親子の救出の為に、ゆっくりと歩き出した。

ちなみに、「気分が悪いから」と招待されていたパーティに出席せずに王宮に戻ったルークにまで、ユース侯爵の絶叫は届いていた

の
だ
っ
た。

おまけ番外編 蛙の親は蛙。(後書き)

読んで下さり、ありがとうございます。

いつか、パパ&ママの大恋愛の話も書けたらいいな・・・と思っています。

ルーク&花* b u b uさまバージョン

b u b uさまから頂いた、ルーク&花です！！ありがとうございます！！
ます！！

素敵なんです！！とにかく先に・・・どうぞ召し上がれ♪ ↑？

> i 1 9 1 3 9 — 2 5 4 3 <

ど、どどどですか！？素敵でしょ！？なんかもう・・・グヘヘ
でしょ！？（え？それは私だけ？）

ああ、どうしよう・・・2人の絡み（絡み言うなw）が、何て言
うか・・・

・・・*・・・（*`エ、*）ウツトリ・・・*・・・妄想中。

だって、後ろから抱きしめですよ！！

花かわいいし、ルーククールで（ププ）かつこいいし、花かわい
いし（あ、これ言っただな）胸が程良い大きさだし（ここ重要w）、
何と言うか守ってあげたい！！って思っちゃいます！！

ルークが花を大切に思ってる感も出てません？

頑張つて、もりもり書くぞー！！って思いました。もりだけに！
プー！（* m ）＝3

以前から、よく言っています、元々ルークと花はこんなに早く
ひつつく予定ではありませんでした。

私が目指していたのは逆ハー・・・なのに、早々にルークが自覚し

（予定では花が攫われてから自覚するはずだったのに）、押される形で花も自覚し（花は戻ってきてから自覚するかな？くらい）、なのでもっとセルシヨナードでの色々もゆっくりと進むはずだったのに（その分、攫われるまでが早く進むはずだった）、ルークがイライラしているから、せっかちに進みました（めっちゃ言い訳）。とにかく、ルークがやたらと暴走するので、抑えるのに苦労します。

意外と？設定とか行きあたりばったりだったりするので、辻褄が合わなくなるような事がないよう気を付けながら進めてますが（あくまでもつもりです）、この先どうなることやら・・・ラストのシーンだけは決めているので、これ目指して最終エピソード頑張りたいと思います（いや、その前にあと少しセルシヨナードの片付け残ってますが）。

b u b u 様、本当に素敵なイラストをありがとうございました！！

おまけ番外編 親子の朝。

「おかえりなさい！ 父さま！！」

元気な声が聞こえると同時に、ポフツとジャスティンの上に重みがかかった。

「……ただいま、クリス。それから、おはよう」

掛け布にそつと潜り込むシェラを横目に見ながら、ジャスティンは向きを変えた身体の上から滑り落ちそうになるクリスを掛け布越しに抱きとめた。

クリスは嬉しそうに笑い声をあげる。

「おはようございます、父さま」

丁寧に挨拶を返す息子の頭を撫でたジャスティンは、少し驚いた様子で微笑んだ。

「いつの間に転移ができるようになったんだ？」

「父さまが、セルシヨナードまでおつかいに行かれてるあいだです！！」

顔を輝かせたクリスの答えに、プツと吹き出すシェラの気配がある。

それからシェラは笑いを堪えながら起き上がった。

「父さまを驚かせたいって、一生懸命練習したのよね？」

優しく口を添えるシェラがいつの間にか夜着を纏っている事に、ジャスティンは意味ありげな視線をやり、それから嬉しそうにクリスを強く抱きしめた。

「すっかり驚かされたよ！」

声を上げて笑いながら苦しいと訴えて逃れようとする息子を、更に強く抱きしめて何度もキスをする。

やっと解放されたクリスはよろよろとしながらも立ち上がり、ジャスティンに意志の強い視線を向けた。

「父さま！ ボクはもう赤ちゃんじゃないんですから、キスするのはやめて下さい！！」

「そうか？ それは少し寂しいな。では、お前がいなくなったとテイラに心配をかける前に早く部屋に戻った方がいいんじゃないか？」

苦笑するジャスティンの言葉に、クリスは「そうだった！」と言いながら、今度は扉から走って出て行った。

それを見送ったジャスティンは、未だ笑いを堪えて震えている妻をそっと引き寄せて押し倒す。

「クリスはいつの間にこんなに早起きになったんだ？」

「今日だけよ。昨日はあなたが遅くなるのがわかっていたから、今日は早起きして父さまに会って意気込んでいたの。すぐに身支度をして戻って来ると思うわ」

「もう一度、この夜着を脱ぐ時間は？」

「ないでしょうね」

「残念だな」

そう言いながらも、シエラに軽いキスを落として起き上がったジャスティンの顔は幸せそうに輝いている。

シエラもまた、そんなジャスティンを見て幸せそうに微笑んだのだった。

おまけ番外編 ハナの才能 (前書き)

以前、本編に掲載していたものをこちらに再掲載させていただきます。

おまけ番外編 ハナの才能。

「何だそれは？」

「にようつ！？」

書物机に向かっていた花は、いつものように突然後ろからルークに声を掛けられて悲鳴？ を上げた。

—— 「にようつ」って言っちゃったよ……もう！！

「だから、いきなり声をかけるのはやめて下さいって言ってるじゃないですか！！ ああ……線が歪んでしまいました」

「……………」

花の反応に微妙な顔をしていたルークだったが、結局はいつもの様に花の抗議を無視して質問を続けた。

「で、なんなんだ？」

「犬を描いていたんです」

「……………犬？」

眉を寄せるルークに、花は弁解する。

「線が歪んでしまったから、そうは見えないかも知れないですけど……………」

「——犬には四本の足があったと思うが……どこにあるんだ？」

「こ、これから生えるんです!!」

「……そうか」

どうやら花には絵の才能がないらしい事を知ったルークは、それ以上絵の内容について触れる事はやめた。

「それで、何を思っていきなり犬を描いているんだ？」

「思い出したんです」

「何を？」

「学校の調理実習の時、友達の沙耶に『花は料理界の岡本太郎だ』って言われた事を」

犬に棒——ではなく、どうやら足らしき物を描き足した花はルークに向き直って答えた。

が、言葉の意味も何もかもがよくわからない。

「どういう意味だ？」

「岡本太郎氏は芸術家なんですが、芸術だけでなく民族学などにも造詣が深くてピアノに関してはプロ級の腕前だったそうなんです！そして代表作の一つには『太陽の塔』があるんですよ。思わず『月光の塔』を連想してしまいますが、そびえ立つその姿はまるで違つてとてもユニークなんです。ただ残念ながら『太陽の塔』の第四

の『顔』は行方不明になっていて、未だに手掛かりがないんです。まさか廃棄処理なんて事にはなっていないといいんですが……」

「……………そうだな」

花の説明はやはり意味不明でますます理解出来ないのだが、ルークは頷くしかなかった。

「で……………ハナと料理とその人物とどう関係するんだ？」

「爆発するんです」

「は？」

なんとか理解しようと努力したルークの問いは、更に謎を呼んでしまう。

「私がお料理すると、なぜか爆発するんです」

「何の魔法だ、それは？」

「ええ？　魔法の訳ないじゃないですか。自然現象です」

「……………明らかに不自然だろう」

「そ、そんな事はないと思いますけど。私はただ……………ちょっと、お料理が苦手なだけで……………」

「……………ちょっと、か……………」

小さく呟いたルークは、間違っても花が調理場に足を踏み入れる事がないようにと、周囲に徹底させる事にしたのだった。

おまけ番外編 ハナの才能 (後書き)

読んで下さり、ありがとうございます。

今年は岡本太郎氏生誕100年です。

復元された第4の顔「地底の太陽」は万博記念公園内の施設にて10月10日まで公開中です♪

おまけ番外編 苦い思い出。

ランディは恋をしていた。

いわゆる初恋である。

社会見学という名目で街へ出た折に彼女を見かけたのが五日前。

その日から名前も知らない少女に恋い焦がれて夜も眠れないでいたランディは、今日から通う事になった学院にひよっとしたら彼女がいるのではないかとの淡い期待を胸に抱いて、学院の門をくぐった。

お付きの者を側に従えた彼女はその家柄が窺えたし、年の頃も同じに見えたからだ。

とは言っても、女子と男子では学舎が違う。

しかし、合同授業の時などに捜せば見つかるかも知れない。

—— いや、きっと彼女なら学院にいればすぐに見つけられるはずだ！

ランディはそう固く信じて、教室の割り当てられた自分の席へと着いた。

そして教室内を見回す。

今回の入学に当たって、ランディにはもう一つ楽しみな事があった。

それは、最上位貴族であるカルヴァ侯爵家の三男、ハロン・カルヴァに会う事だった。

今までランディは何度が昼間に催される社交行事に出席した事があったのだが、残念ながらハロンとは一度も出会う事なく、似たような立場である同年代のハロンにずっと興味を持っていたのだ。

それから教師が来るまでの間、すでに親しくなっている上位貴族出身の者達と取り留めの無い話をして過ごしていたランディは、教室に新たに入って来た人物を見て思わず驚きの声を上げた。

「えっ!？」

驚いたのはランディだけでなく他の生徒達も同様で、教室内はざわつき始める。

だが、当の本人はそれを意に介さず黙ったまま席に着いた。

—— どうしよう……。彼女にここは男子学舎だって教えた方がいいんだろうか？

ランディは悩んだ。

名前もわからなかった恋する相手が目の前に現れた事は非常に嬉しいのだが、その彼女が明らかに間違えた行動をしている場合、指摘してもいいものなのかどうか、ランディには難しい問題だった。

—— でも先生に注意されるよりはいいよな？

他の生徒達は遠巻きに見ているだけだったが、ランディは勇気を出して彼女に話しかけようとした。

それをきっかけに仲良くなりたいなどという下心はもちろん全くない……はずである。

しかし、ランディが立ち上がったところへ、担当教諭らしい大人が教室へと入って来て生徒達に声をかけた。

「はい。皆さん、席に着いて下さい——」

教諭は一瞬彼女に視線を向けたが、なぜかすぐに目を逸らすと何

事もなかったかのように出席を取り始めた。
そして――。

「――ハロン・カルヴァ君」

「はい」

どこか気まずい空気が流れていた教室は、彼女が返事をした事に
よって大きく揺れた。

「あれがハロン・カルヴァ!？」

「マジで!？」

「嘘だろ!？」

「皆さん、静かにして下さい」

口々に上がる驚きの声を、教諭が寝めて静かにさせる。

だが、教室の空気は落ち着きをなくしたままだった。

そしてランディは言葉も出ない程の衝撃に見舞われて青ざめてい
た。

初めて恋した相手が男だった。

これはランディのこの先も続く長い人生における唯一の汚点と言
っても間違いがないだろう出来事だった。

ただ誰にも知られずに済んだ事が幸いである。

その後、最上位貴族のカルヴァ侯爵家の子息という事もあり、殆
どの同級生がいつも女装しているハロンを見て見ぬふりをしていた

のだが、中には陰で笑う者達もいた。

しかし、ハロンは何も言わない。

その事に調子づいたのか、次第にあからさまにバカにする者達が現れ出した。

ランディにはそれが許せなかった。

初めこそ衝撃のあまりハロンに対してどこかギクシャクと接していたのだが、実際のハロンは非常に才気に満ち溢れた少年でランディとはとても気が合い、親友と呼べる程に仲良くなっていた。

だからこそ、ランディは大切な友人をバカにする少年達も、それをただ受け止めるだけの友人ももどかしくて腹が立つのだ。

そして遂に、度を超えた少年達の態度にランディが我慢できなくなった時、ハロンはランディを制して静かな口調で少年達に告げた。

「それ以上は止める。兄が来る」

たったそれだけの言葉だった。

それから踵を返して立ち去るハロンを、少年達は嘲笑した。

「十歳も過ぎて未だに兄ちゃんに頼ってんのか？」

「バカじゃねえの？ さすが女々しい奴だな！」

「かつこわりい！」

その背に投げかけられる侮蔑の言葉を無視できるハロンを尊敬しながらも、ランディは悔しかった。

「なあ、いいのか？」

「いや、良くないな。兄が怒ると厄介だ」

その時のランディにはその返答の意味がわからず、ただ訝しげに眉を寄せた。

しかし翌朝、ランディ付きの侍従から告げられた言葉に驚き、急いで学院へと向かったランディは嫌でも理解する事になった。

男子学舎が消えていた。

幸い怪我人などは一人もいなかったらしいが、昨日までどこにも異常の見られなかった学舎が跡形もなくその姿を消していたのだ。

慌てふためく教師陣やどこか興奮した様子の生徒達、その中で啞然として立っていたランディの横にハロンが並んでボソリと呟いた。

「こう来たか……」

「何が？」と問おうとしたランディはそこに突然現れた人物にハッとして息を呑んだ。

他の者達も途端に口を閉ざし、その場は緊張と今まで以上の興奮に満ちた空気に包まれた。

あのディアン・ユース伯爵がルカシュティンファン皇子殿下と共に転移して来たのだ。

「おや、彼が久しぶりにサイノスに戻って来たようですね」

「……」

ずいぶん楽しそうなディアンとは逆に、隣に立つルークは呆れたように溜息を吐いた。

どうやらディアンは原因究明の為に王宮から派遣されて来たらしい。

そんな二人の元に、顔を真っ青にして脂汗を浮かべた学院長が急いで駆け寄る。

「ま、まま、まさか、お、皇子殿下とユース伯爵にお越し頂けるとは……」

「お久しぶりですね、学院長。ああ、殿下は暇そうなので私が連れて来ただけですから、無視して頂いて構いませんよ」

「は、はあ……」

「……」

爽やかに微笑んだディアンは、狼狽する学院長の向こう側にいるハロンへと目を止めた。

「やあ、ハロン、久しぶりだね。相変わらず君の兄さんは……君を弟とは認めないんだね？」

「……お久しぶりです、殿下、ディアン様。兄に関しては……あと五年もすればきっと納得してくれると信じていますから」

「……だといいけどね」

「……」

成人したヴィートやラルフが未だに中性的な容姿である事を思えばあまり期待は出来ず、ディアンもルークもどこか慰めるように頷いた。

それでも声変わりをすればきつと……と、ハロンは一縷の望みを

かけているのだ。

「あ、あの……ユース伯爵、それでこれは……？」

「この学院の誰かが彼を怒らせたのでしょうか。まあ、災難だったと思って諦めて下さい。ああ、もちろん新たな学舎の建設費に関しては全てカルヴァ侯爵家へ請求して下さいね」

学院長の問いかけにあっさり答えたディアンは、未だ一言も発しないルークへと黒い笑みを向けた。

「さてと、私は執務に戻りますから、お暇な殿下はそろそろ訪ねてくるだろう彼の相手をして下さいね。これ以上私の手を煩わせないように、しっかりお願いしますよ？」

「……」

そんな会話をしながら消えた二人を、その場の者達は呆然として見送った。

「ハロン……結局、これはどういう事なんだ？」

「……兄の怒りのあらわれかな……」

「……そうか」

酷く申し訳なさそうなハロンに、ランディはそれ以上何も言えなかった。

だがランディには心に重くのしかかる事が一つあり、それが思わず口からこぼれ出た。

「俺、教本を置きっぱなしにしてたんだよね……」

「……うちで全て弁償するよ」

「いや……規則を破って机に置きっぱなしにしてた俺が悪いんだ。だから覚悟して父上のお叱りを受けるよ」

「……グラン伯爵はとても厳格な方らしいな。特に身内には厳しいって聞いたけど大丈夫か？」

「ああ……たぶん」

この後、ランディは父親であるグランから「身分のある者はそれだけの責任が伴うのだから、人々の模範となるよう生きる義務がある」などと長くて厳しい説教をされた。

その為、もう二度と父親から叱られる事のないよう、誰にも恥じる事のないように生きようと固い誓いを立てたのだった。

ちなみに、新たに建設された学院の男子学舎は今までの通称——ユース御殿から五十四年ぶりに名前を変えて、カルヴァ御殿と呼ばれるようになった。

また行方不明になったユース御殿は、ずっと学校建設を希望していた辺境の貧しい村々の間の地に突如現れて人々を驚愕させた後に、中央の許可を得て有効に活用される事になり非常に喜ばれたのだった。

おまけ番外編 苦い思い出。（後書き）

ディアンは父親の後を継ぐまでは伯爵位にありました。今はレナードが伯爵です。

明日、12月1日は妄想部『妄想学園七不思議』18時スタートです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3233p/>

『猫かぶり姫と天上の音楽』イラストギャラリー♪

2011年11月30日22時51分発行